
羽衣を縫う糸

ぽち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽衣を縫う糸

【Nコード】

N2784B

【作者名】

ぼち

【あらすじ】

無職な酒飲みオトコと天衣無縫なキャバクラ嬢の奇妙な同棲（居？）生活。12／18にタイトル変更しました。元『天女の羽衣』です。

序章

あの頃、キミの唇から零れ落ちた言葉の、どれほどがホントでどれほどがウソだったんだろう？

もしボクがキミの言葉のすべてを信じていたら、ボクらは今でも同じ空間を共有できていたのかな？

今でもキミは誰かのために、ぷっくりとした愛らしくも憎らしい唇から、たくさんの『ホント』を洩らしているのかな？

でもね、ボクは覚えてる。キミがボクに向けてくれた子供のように真っ直ぐな瞳を。愛情を。ホントを。ウソを。

そして心の片隅で願っている。いつかキミのどこか歪んだ羽衣を、誰かが縫い直してくれるコトを――。

第1話「今宵いつものバーへ」

あの日、ボクは酔っていた。道路のセンターラインが二重どころか三重に見え、ついでにぶつかりながら止めたタクシーに乗車拒否されるくらいには。

財布の中には3軒目で貰ったお釣りが千円ちょい。ポケットのジャラ銭を合わせても、とてもじゃないがカプセルホテルすら泊まれやしない。

このままじゃ確実に轢死か凍死だな……。歩道脇に止められたボロボロの自転車（モチロン、誰のモノかはわからない）に寄りかかり、始発までの時間を思う。季節は冬。近くに住んでいる友人も：この時間じゃ起きてはくれないだろう。

そしてボクは歩き出した。酔いに任せて——と言うよりも、仮眠を取りたくて——いつものバーへと向かうために。

そういえば、初めてアソコに行ったのも、こんな夜だった。

それはまだボクが所謂ちゃんとした社会人をやっていた頃の話。あの日はボクの送別会で、新橋、銀座、新宿とキャバクラやなんかを何軒もハシゴして。最後はどこで誰と飲んでいたのかさえも覚えていない。

そんな朦朧とした意識の中、まだ家には遠いというのに、なぜかこの街でタクシーを降り：歌声と笑い声がかすかに聞こえる、このバーの扉を開けたのだった。

「あっ、西野さん、いらっしやい。珍しいじゃん、こんな時間に」
「いやぁ飲み過ぎちゃってさ。今日は早く帰る予定だったんだけどなあ」
「西野さん、飲み過ぎるとウチ来る癖、絶対止めた方がいいって（笑）」

7席ほどこかない木目の低いカウンターと小さなボックス席。その後ろには全国各地から集めたという焼酎のボトル棚。シンプルというよりは殺風景という言葉がお似合いな小さなバー。

ココがボクの行きつけで：キミと出会った場所だった。

第2章「テーブルから散弾銃？」

あれからどのくらいの時間が経っただろう？

さすがに平日の朝方というだけあって、早い時間に見かける常連客の姿は見当たらない。いつもならば何かと話題を提供してくれる店長も、どこかのキャバクラから来たのであろう数名の女性客に掛かりきりで、話しかける隙がない。

このまま少し眠ってしまおうか……。スツールの背にもたれ、こっそりと瞼を閉じようとした、その時。バンツツツ！ とテーブルを叩く派手な音と共に、女性客のひとりが立ち上がった。

「ちょっといい加減にしてよねっ！ アンタたちなんかに、わたしのコト、口出しされる筋合いないしっつっ！！ 何にも知らないクセに勝手なコト、言わないでくれる？？」

「てかあゝいきなりキレられても困るんですけどお。ウソっぽいからウソっぽいって言っただけじゃんねえ？」

仲間割れなのだろうか？ 狭い店にヒステリックな怒声が響き渡る。ついつい向けてしまった視線の先には、片手を顔の前に挙げ、ゴメンと謝る店長の姿。気にしないでと首を振り、再び前に向き直った瞬間のコトだった。

ガシャーン！

テーブルの上のグラスやらが倒れる音と共に、立ち上がった女性が太ももの辺りを抑え、倒れ込むのが見えた。

「おいっ！ オマエら、いい加減にしろよっ。ほかにも客いんの、わかってんのか！？ てか出てけ、もう二度と来んなっ」

「だってえゝコイツ、めっちゃムカつくしいゝ」

「いいから帰れよっ！」

突然キレた店長に文句を言いながらも、倒れ込んだひとりを残し、女性たちは口々に文句を言いながらも店を後にした。

「おい、麻美、大丈夫か？ あゝあゝアイツら、派手に壊しやがって…」

割れたグラスと零れた氷が乱反射。テーブルの上はもちろんのこと、ボックス席の床からソファーまで、本当にキツチリ（！？）汚されている。ちなみに麻美と呼ばれた女性はと言えば、これまたキツチリ水浸し（いや、酒浸しかな？）になっていた。

「西野さんもゴメンねゝ。こっち片付けたら、なんか一杯オゴるよ。ホラ、麻美も座り込んでないで服拭けって」

「…麻美ちゃん、だっけ？ ま、とりあえずこっち来て飲み直しなよ」

……。こうなったら仕方ない。袖触れ合うも多生の縁ってヤツでしょ？ なんて、ホント、本当に軽い気持ちで、ボクはキミに声を掛けるコトになったんだ。

第3章「ボクとキミの受難の朝」

あの日のキミは…とてつもなく酒癖が悪かった。と言っても、ボクの記憶が正しければ、の話だけど。いや、間違いなく、悪かった。ついでに言えば、ご機嫌の方も恐ろしく斜めだったんだけど。

タイミングがよかったのか、悪かったのか、彼女たちの喧嘩が終わってからというもの、店の客足は途絶えていた。ボクはと言えば、おかげさまであれほど耐えられなかった眠気もすっかり覚め、店長にオゴって貰った焼酎に舌鼓をうっていた。

横には奇しくもキレイな女の子。うん、朝まで飲んだくれるのも悪くないね、たまには、と心の中でこっそり呟く。

これまでに聞いた話をまとめると、麻美ちゃんは近くのキャバクラに勤める23歳。この店の所謂遅い（というか一般的には朝方の）時間帯の常連客というコトらしい。どおりで腕やら耳やら首筋やらがジャラジャラキラキラしてるワケだ。

ボクも大概呑ん兵衛だが、麻美ちゃんも負けず劣らずといった感じらしい。JINROのネックをみる限り、優に20本は超えている。先ほどよりは多少口調がゆったりとしているものの、酒のペースは変わっていない。きつとかなりの酒豪なのだろう、と店長に問うと、こう一言返ってきた。

「…西野さん、きつと後悔しますよ……」

……。そう、それから約1時間後。ボクは店長の予言を、身をもつ

て体験するコトになった…。

「麻美ちゃん、麻美ちゃん！ タクシー、どっち側から乗ればいいのか？」

「知らない。てかどっちでもいゝしゝ」

西野巧26歳。今、猛烈にピンチです！ なんて頭の中から禿げかかった小さいおっさんアナウンサーの実況中継が聞こえてくるとかこないとか。

…ボクの実況が始まったのは今からたった30分ほど前のコトだった……。

第4話「送らされオオカミなんて怖くない」

「にひのさんはくなにをやってるひとなんですかあ？」

「…麻美ちゃん、もしかして（しなくてもだけど）キミ、酔ってるでしょ？」

店内にはたったの2人、席を並べれば話をしたくなるのもわかる。ましてやそれが酔っ払い同士なら。加速度的に酔いが廻ったのか、彼女の声は伸びてしまったカセットテープの音のように低速回転を保っていた。

カウンター越しに苦笑いしている店長が、彼女のグラスに水を注ぐ。

「んくくくでもおくこんなじかんにのんでるってことはくもしかして」

グラスを両手で握りしめ、カウンターに突っ伏しながらもボクの顔から眼を離そうとしないキミ。例えばボクがキミの彼氏だったならば。ボクはこっそり妄想する。

とろりと溶けた瞳を閉ざさせて、まずは瞼にキスをして。質問だらけな唇も聞きたがりなその耳も全部全部食べてしまおう。

キミの質問をテキストに流しながら、甘露な妄想に励んでいると、突然、キミは宣った。今までのスローモーさとは裏腹な、ジェット機並みのハイスピードで。

「にっち、そんなに暇だったら、ウチで家事手伝いやってよ！ うん、それがいいわ。シンちゃん、お会計っっっ！」

はい？　今、アナタ、なんとおっしゃいました？

「だってにっち、家事得意なんでしょ？　料理も洗濯も掃除もなんでもござれて言ってたじゃん」

確かにそんなコトはあるのだけど、いや、だから、そうじゃなくて……。

「いーの、もう決まったの！　だ・か・ら、シンちゃん、にっちの分も早くお会計して！！」

ボクは訳がわからない。というよりも、男2人はこの状況がわかっていない。どうしたものかと店長を見るも、彼もまた、フリーズ中のご様子だ。

「わ、わかった。と、とにかく、麻美ちゃん、家まで送るから、お、落ち着いて……」

ボクが言い終わるのを待つことなく、キミはコートを羽織り、カウンターにピンとした真新しい1万円札を放り出した。

キャバクラって儲かるんだなあ……なんて感心してる場合じゃない。

スタスタと早足で歩き始めたキミは、店の扉に辿り着く前に焼酎の棚とご対面。ステンツと効果音が聞こえそうなほど見事な尻餅に、思わずボクは10点満点、じゃなくて送りオオカミならぬ送らされオオカミを請け負ったのだった。アーメン。

第5話「明るくもないタクシーの中で」

千鳥足のキミはとてもとても迷惑だったーなんて、朝方まで千鳥足だったボクが言えた筋合いじゃないのだけど。タクシーに乗り込むまでの時間は、ハッキリ言って『地獄』だった。

歩かない。

座り込む。

ぶつかる。

走り出す。

なんだね、キミは。もしかして幼稚園児かね？

周囲を歩く通勤途中のサラリーマンやOLの冷たい視線に耐えながら、なんとかキミをタクシーへと押し込めば……

「…お客さんもご一緒ですよね？」

肩越しの視線がさらに痛い。はい。すみません。正直、ボクも帰りたんですけど…電車も走ってるコトですし。なんてドライバーに言えるワケもなく、仕方なしにボクも車に乗り込むコトにした。

「大久保通り、まっすぐね。環七のトコら辺」

そしてさらにボクを見てニッコリ。…か、可愛い……かも？　と思いきや、ドサリと頭が落ちてきた。いや、比的にじゃなくて、本当に。

膝枕をしたのなんて、かれこれ何年ぶりだろう？　まあ…確実に1年はしてないな。窓から差し込む冬の鈍い光すら眩しいのか、彼女

がボクのダウンを引き寄せる。

こうして明るい場所で見ると彼女は、少し化粧がハゲかかっているものの、なかなか可愛らしい顔立ちをしているようだ。

ストレートロングの薄茶色の髪、色白の肌、赤みの強いぽってりとした唇。…素顔がどうかはわからないけど、まずまずボクの好みではある。

「お客さん、そろそろ着きますけど…」

キミの寝顔を眺めるうちに、うとうとしていたボクは、その声でハッと顔を上げた。

「麻美ちゃん、起きて。家、どこ？ オレ、わかんないよ」

と揺り起こすもそのかいなく、差し出されたのは二つ折りの長財布。ああこれこれ、ギャルの定番ね！ って違うだろ！！

一向に起きる気配のない彼女を背負い、タクシーを後にした。

「あっち」

ジャラジャラという音の先には白いマンション。

「503」

手にはしっかりとキーケースが握られている。ここまで来たら、もう自棄だ。ヨイショと背中のお荷物を背負い直し、『あっち』の『503』号室へと歩き出した。

第6話「ダストシュートの森」

キミが指差したマンションは比較的古めの小さなモノだった。駐車場こそついているものの、駐輪場はナシ。そして、なんと！エレベーターまでついていなかった…。

ん？ てことは…もしかして。ボクは階段で、しかもキミを背負ったまま『503』まで行ってくつてコト？ まっさっかつね♪ あまりの衝撃に思わず歌い出しそうになる。

右手に手すり、左手にキミ。ところどころ剥げかかったペンキが妙に哀愁を誘うのは気のせいじゃないだろう。これだけ動いているにも関わらず、ぴくりともしないキミは大物だよ、ホント。

膝はガクガク、左手も痺れ始めた頃、ボクは『503』へと辿り着いた。

西野選手、やりました！ ついについにゴール目前です！ 小さいおっさんアナウンサーが狂喜乱舞の声を上げる。些か回しづらいカギを開け、部屋へと続くキッチン兼廊下を歩く。

カチャリ。

ドアの先は…まるで服のダストシュートのようだった…。

床にソファ―にベッドにと散らばる服の森。掻き分けど掻き分けど、床面が見えてこないのは気のせいではないだろう。

開いた右手でベッドの上の服を払いのけ、ひとまず彼女を揺り起こ

す。

「…寝る」

え！？ 今、なんと？ ねえねえ、キミって、ホントにホントは幼稚園児？ 人に何かしてもらったら、まずはありがとうって習ったよね？

「そこ」

哑然呆然のボクを尻目に、ベッドの中からキミはソファアを指差した。どうやらここで寝ろと言いたいらしい。

「いや、さすがに帰るし…」

との返答もすでに夢の住人となったキミには届かなかった。

第7話『月とスッポン。そして…』

とりあえず『あっち』と言われたソファ―に寝ようと居場所を確保するものの、立派な成年男子が足を伸ばして眠れる程のスペースがとれるハズもなく。ボクはキミの眠るベッドへと『移住』したワケで。誓ってもいい。そこにエロスのエの字もなかったコトは！…その瞬間には……だけど。

バチンッ！

突然の衝撃にボクは慌てて飛び起きた。…？ あれ、ここってどこだった？ 顔をしかめながら辺りを見渡すボクをキミは構いもせず、相変わらずの口調でこう告げた。

「悪いんだけど彼氏ならいるから、触るの、お断り。ほかで抜いて」

はい？ てコトは、さっきの衝撃は…キミのビンタってコトですか？

「ごめんねゝ寝ぼけてたみたいで」

と送りオオカミさん。

「寝る。邪魔しないで」

とお姫さま。

この状況、考えてみたら、ホントはかなりマズいんじゃない？ 今、彼氏がいるとかなんとか宣ってましたよね、アナタ。

「ごめん、寝てるところ、悪いんだけど…」

目をこすり、限りなく幼稚園児に近い機嫌の悪いキミから話を聞き出す。

結果、なんとか理解できたのは、以下の3つのコトだった。

1. 麻美嬢には彼氏がいる。しかし、彼氏はIT屋さんだかなんたかであまり会うコトができない。

2. 彼氏には操をたてているため、例え、オトコ（主にボクのコトだろうけど）が泊まっていようと、住んでいようと、そういう関係にはならない。

3. よってボクは純粹に家政夫として囲われる。

はい。了解しました。…。あ、の、ねえ？ 男を舐めるのもいい加減にしろよ、と怒鳴りそうになったところで、ボクの僅かに残った理性と打算が囁きかけた。

まあ、カラダにはよくないかも知れないけど、ここにいれば、食費と光熱費は安くあがるぞ？ 暖房もあるぞ？ — 1 + 3 ≧ 2。プライドの分を差し引いても1余る。

背に腹は変えられぬ。無職のボクの預金通帳とキャバクラ嬢の彼女の預金通帳。それは比較するまでもなく、月とスッポンの関係なワケで。…まあいっかな。不覚にもボクは、見返りのない労働をキミに捧げるコトを自ら選択してしまったのだ。

第8話『モーニングショット!』

微かに漏れる陽の光に誘われて目を覚ますと、すでに彼女は目覚めていた。昨日の夜（正確には朝だが）の出来事がウソのように、スツキリとした顔をして。一方、ボクはと言えば、深酒をした翌朝の恒例行事とも言える頭痛の真っ只中だったのだけけれど。

いつの間にか化粧を落としたキミは、思っていたよりも幼な顔で。キャミソールからは手のひらサイズの胸が見え隠れする。…？ ん？ 胸！？

「男を前にその格好はないんじゃない？」

起きて一発めの言葉がこれとは情けない。

「あ、起きた？ おはよう♪ ご飯作って☆」

前言撤回。発言だけは元のままだ。が、やると決めたが由良乃助。まずは目覚めの珈琲を…と薬缶を取り出し、火にかけた。

「珈琲いる？」

「いるけど、ないよ」

…。ない、というのはアレのことですかい？ ひとり暮らしの必需品、インスタントコーヒーの素のこと？ 一体、キミはいつもどんな暮らしをしてるのかね？

そしてボクは改めて、部屋と、部屋に佇むキミを見渡した。うん、

部屋ごとキミごと粗大ゴミ行き決定！　ってお茶目なコトは言いたくないが、陽に照らされた部屋は、かなりの軌道修正が必要な様子だった。

「…とりあえず買い物行こう。コーヒーと…きつと食料もないんでしょ？」

「はい」

菩薩の如く微笑みをたたえ、キミが手渡したのは、昨日の長財布。開いて見るとそこには何枚かの福沢センサー。あ、どうも、お久しぶりです。って違うだろ！

「あたし、お風呂入るから。ご飯、よろしくネ」

ウィ、ムツシュー！　じゃなかった、マダム！！　じゃなくて！

「スーパー、どこ？」

「あっち」

簡潔かつ簡単なお答え、ありがとう。ボクは自分の素晴らしい適応力に拍手を送りつつ、寝癖でボサボサの髪を軽く整えると、キミの笑顔に見送られ、スーパーへと旅立った。

第9話『ボクのハートはくりいむしちゅー』

マンションから約10分、『あっち』のスーパーにたどり着く。まだ午後早い時間というコトで、店内には暇そうな奥さま方の姿がちらほら見えるばかりだった。

若い（…そこまででもないけど）男が平日のこんな時間に…と不審そうな眼で見られながらも、ボクは手早くかつ的確に必要な食材と部屋に見あたらなかった掃除用具を買い物カゴに納めていく。

牛乳にタマネギ、ジャガイモくん♪ 鶏さんも買えば、あつという間にくりいむしちゅーの出来上がり！ 今日の夕飯のメニューは決まりだな。

ちょっとした自慢のだけど、ボクはなかなかの料理上手だ。こだわり料理から節約カンタン料理まで、ハッキリ言って、何でもござれ。なんてたってひとり暮らしが長いからね！ ってこっちの方は自慢でも何でもないんだけど。

1年前、つまり、ボクが会社を辞めるまでは、彼女と呼べる存在もいた。本当ならば結婚も…する予定だったワケだ。でも、ボクは逃げ出した。社会から。そして彼女から。無責任だと言われるかも知れないけれど、ボクにとっては、それは重要なコトだったんだ。

と、いけない。今のボクには感傷に浸っている暇はない。お腹を空かせた幼稚園児が駄々をこねて待ってるからね。

「ただいま」

「おかえりー」

さほど大きくもないスーパーを一回りし、ボクが買い込んだのは、食材2人前約3日分とバルサン含む掃除用具の計2袋。もちろん、当初の目的、インスタントコーヒーも抜きなく購入した。

うん、初日の戦利品としては悪くない。冷蔵庫に戦利品をしまい込み、朝食用のチーズトーストとスクランブルエッグに取りかかる。

「いったきまあす」

出掛ける前よりは多少服の量が減ったのか（あとで洗濯機に入れただけなのが判明したけど）、どこからか出てきたテーブルに並んだ食事はものの15分ほどでなくなった。

「にっち、料理、上手ね。うーん、いい人見つけちゃった！」

いやいや、それほどでも…っておかしくないか？ その発言。ま、美味しかったならいいけどね。

こうしてボクはヒモ（！？）生活の最初の労働を、無事、終了したのであった。

第10話 『ボクのお仕事』 ※修正版※ (前書き)

12／25更新の第10話を一部修正しました。

第10話『ボクのお仕事』※修正版※

予定通り、クリームシチューを胃袋に収め、キミが出かけたのは午後6時。いやあ、早くから働いてるんだね、と茶化すボクに一言。

「オトコがバカだからでしょ」

はい、その通り。というか、なんてシュールな答え。でもね、オトコがバカじゃなかったら、今、ココにキミの家政夫さんはいないのだよ？ などと思いつつ、グツとこらえて『いってらっしゃい』。

ここからがボクの仕事時間というワケだ。しかし、ときれいに空になった皿を片付けながら、誰に問うでもなくひとり愚痴る。キミは一体、今までどんな生活を送っていたんだね？ 右を見れば寝起きのままに放り出されたパジャマと思いきワンピース、左を見れば本棚らしき棚に詰まれたマンガ、CD、MDの山。そして部屋のいたるところに、そう安くもなさそうなブランドの服やら煌びやかなドレスやら、果てはストッキングにハイヒールまでが転がっている。

服を片付ける。

洗濯機を回す。

ゴミを捨てる。

そしてまた、

服を片付ける。

それからの5時間はだいたいその繰り返し。やっと床全体がキッチンを現れたところで、ボクは休憩を取ることにした。

大量に撒き散らされた服を片付けてみて気づいたコトがひとつある。ここの部屋には、本当に家具が少ないのだ。備え付けのクローゼットに、本やらなんやらいろいろなモノがギュウギュウに詰まった本棚、そして小さなオーディオ。最後に丸型のテーブルにふたり掛けのソファとベッド。あ、あとは台所周りのもろもろも。

そう、現代人の常識であるTVすらない。

つ・ま・り。

ココの空間には娯楽と言われるモノは本棚の中に詰まっているワケだ。そして、何某かの娯楽を求め、彷徨っていたボクの瞳が左を向く。と同時に、逸れていく。

ハッキリ言わせてもらおう。あそこのゾーンを片付けるには、少なくともあと1日は必要だ。目にとまった2つの本棚（うちほとんどが紙類）。捨てるモノ、残すモノの選択は彼女に任せるとして……ミイラとりがミイラとり。日本人は勤勉だね。そんな言葉が頭の片隅をよぎっていく。

結局ボクは、その日の仕事をあきらめて、夜の昼寝（！？）をむさぼるコトにした。

第11話『彼女のお仕事』

ピンポンピンポン♪

立て続けに鳴らされたチャイムの音で、ボクは意識を取り戻した。
枕元に置いた時計の針は、おやつの時間を示している。ってコトは、
ご主人さまのお帰りかい？ まだ覚醒しきれないカラダを無理矢理
動かし、ボクは玄関へと向かった。

「おかえりなさい」

「お腹減った」

…。相変わらずの返答にそのまま座り込みそうになる。だくかぐら、
帰ってきたら、まずはただいまでしょ。そんなボクを尻目にキミは
言った。

「にっちも飲むでしょ？」

と必殺スマイル。彼女の手からコンビニの袋を引き取れば、中から
出てくる出てくる宝の山、じゃなかった、酒の山。前言撤回、キミ、
最高！

ワインにビール、缶チューハイにJINROの瓶。キミ、酒屋でも
始めるの？ とそんなツツコミをさらりとかわし、彼女はマイペー
スにお部屋へIN。

「うわぁ、スゴイ！ わたしの部屋じゃないみたい！！」

そうでしょうとも、頑張ったからね、家政夫さんは。思わずにやるボクの顔。いそいそと服を脱ぎ捨てるキミの行動。：えっと、服はね、服はね、こうしてハンガーに掛けてだね、衣文掛けに掛けて欲しいワケですよ、家政夫さんとしては。

彼女、散らかす役。ボク、片付ける役。

お互いの役割分担がより明確になったところで、ご主人さまのお腹の具合を確認する。

「ワインに合うおつまみと甘いモノ！」

ウィ、ムツシュ！！　ってコレじゃ某アイドルの看板番組みたいじゃないか。まあ、いいけどね。ワインね、ワインに合うおつまみ：：と言われましても、さすがにそこまでの用意はない。

「そうなの？　んじゃ焼酎飲む」

はい、喜んで！　ああ、これじゃどこぞの居酒屋さんになってしまふ。そんなやりとりもつかの間に、ボクはおつまみを完成させた。

卵とベーコンの炒め物に韓国風冷奴、そして最後は、箸休めのほうれん草とじゃこのおひたし。うゝん、我ながらほれほれするこの手腕。

小さなテーブル一杯に並んだ皿を目の前に、キミは豪快に焼酎を麦茶で割っている。ん？　麦茶？

「これが飲みやすいんだよ。飲みすぎて酔っ払っちゃうけど」

手渡されたグラスにも、やはり、入っているのは同じ物。だまされ
たと思って：と口をつけると、なかなかいい具合。モグモグ、ゴ
クリ、モグモグ、ゴクリ。咀嚼の音と本日の業務報告が終わったと
ころで、ボクは素朴な疑問を投げかけた。ところでこの家、なんで
TV置いてないの？ 壊しちゃったから。買わないの？ うん、あ
んまり観たくないから。ふん。

「観たくないの、あの人が出てるから」

しまったと思うまもなく、何やら意味深な言葉が聞こえ、彼女の瞳
からツウーと鼻水じゃなかった、涙が零れ落ちる。けれどキミは、
こんな時でも、キャバクラ嬢だった。瞳はけっして閉じてはいけな
い。そう教え込まれでもしたかのように、背筋を伸ばし、瞳を開き、
その涙を拭こうとはしない。

ゆったりとしたワンピースから覗く細い首と華奢な肩。くるりと巻
かれた薄茶色の髪が卵形の頬をゆるやかに覆っている。より大きく
見えるようにと太めにひかれたアイライン。これでもかといわんば
かりに持ち上げられた長い睫毛。そして零れ落ちる、涙。

「ごめん、もう寝るね。疲れちゃった」

コトリ。手にしたグラスをテーブルに置くと、彼女は化粧も落とさ
ず、ベッドへと転がった。何の質問も受け付けない、毅然とした背
中をボクにむけて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2784b/>

羽衣を縫う糸

2010年11月11日08時12分発行